

ワレーリヤ・ナールビコワ 『オコロ・エコロ…』三部作について

前田しほ

1) ナールビコワの作品について

ワレーリヤ・スパルタコヴナ・ナールビコワ Валерия Спартаковна Нарбикова、1958年モスクワに生れる。中・短篇小説が得意。主な散文小説の初出は以下の通り。

1988 Равновесие света дневных и ночных звезд. Юность.1988.№8.

89 Видимость нас. Стрелец.1989.№6.

План первого лица и второго. Встречный ход, М.1989.

90 Ад как Да ад как дА. Не помнящая зла, М.1990.

Около эколо. Юность. 1990.№3.

Пробег — про бег. Знамя.1990.№5.

91 Великое кня.... Юность.1991.№12.

Инициалы. МулетаZъ Зороасия, М.-Paris.

94 Избранное или Шёпот шума, Париж1994.

95 Таня. Литературная газета.1995.12.20.С.5.

96 ...И путешествие. Знамя.1996. №6.

なお次の二作品が邦訳として出版されている。

の『ざわめきのささやき』吉岡ゆき訳、群像社、1997年。の『ターニャ』は『魔女たちの饗宴—現代ロシア女性作家選』沼野恭子訳、新潮社、1998年に収録されている。

またの『イニシアル』は『ノームル』67号、鈴木正美訳、早稲田大学文学部ロシア文学専修室「ノームルの会」、1994年に収録されている。北大文学部西洋言語文学研究室発行の「現代ロシア文学作品集」10号から12号の各号にの『一人目のプランと二人目のプラン』、の『オコロ・エコロ…』(ただし一部)、の『大公国…』の前田訳がそれぞれ掲載されている。

以上の作品について、多少の解説を施すと、はの続編であり、単行本バージョンの『昼の星と夜の星、光の均衡』ではが第一、二章では第四章に相当する。、は『オコロ・エコロ…』三部作として知られるもので、単行本ではそれぞれ第一、二、三章を構成するものである。短篇のはのエピソードの一部だが、かなり加筆されていて、中篇のよりもむしろ完成度が高いと思われる。なお、90年代後半から文学活動として目に見えた成果はほとんどあげていないが、最近では画家として活躍しているようだ。

2) 『オコロ・エコロ…』三部作について

今回は基本的に1992年発行の単行本を用いた。雑誌バージョンと単行本バージョンでは多少の異同があるものの、基本的には、先にも述べたように、単行本では『オコロ・エコロ…』が第一章、『競争—走ること』が第二章、『大公国…』が第三章にあたる。それぞれ主人公が共通するが、プロットとしての共通性はほとんどない。ただいずれ

の作品でもペレストロイカという時代性や政治的な含みが多く、特に芸術家と国家権力との闘争に重きが置かれている。また、エロティックな描写で知られるナールビコワの作品の中でも、この三部作はとくに官能的とされている。主要なテーマは「愛」だろう。なお、ナールビコワの作品には奇妙な題名が多いが、Около Эколо...とは Около Эколории すなわちエコロジー周辺、環境周辺といった意味らしい。

ナールビコワの作品の主たる醍醐味は文体にあり、しかもしばしばプロットの弱さが指摘されるので、あらすじを簡単にまとめてしまってもあまり意味はないかもしれない。とはいえ、ロシア文学史上の有名なエピソードや文学作品の人間関係がパロディされていて、その点を追うだけでも興味深い。暗示が多く、明確な舞台設定がつかめない分は、括弧内で補足している。

第一章：オコロ・エコロ・・・

ヒロインのペトラルカ（愛称ペーチャ）と姉のエズダンドウクタは共通の友人で彫刻家のボリースに好意をもっている。ペーチャとボリースは恋人になるが、どうしても姉に告げることができない。一方姉のほうは、自分の家庭的な面をボリースに積極的にアピールしつつける。大晦日の晩、三人は新年のお祝いを企画するが、ペーチャは友人宅で当時手に入れるのが非常に困難な本（ナボコフ）に夢中になって行き損ねる。二人きりになったエズダンドウクタとボリースは結ばれて、しかも姉が処女だったこともあって、二人は婚約し結婚する。ペーチャとボリースの仲は秘められたまま終わる。その後何度か顔を合わせ、関係することもあるが、失意の彼女は半ば自暴自棄に複数の男性とつきあい、結局身をひく。また、この主筋と重なって、ペーチャの友人コストロマーのエピソードが展開する。こちらには奇妙なモンスター・アンドリュシャが登場する。これは半ば黒魔術の産物だが、ソビエト政権の暗黒面の象徴でもある。コストロマーはその祖父が粛清に加担した国家の英雄で、郊外に別荘をもつ特権階級なのだが、アンドリュシャはコストロマーに暗殺を命じ、それを拒否した彼を惨殺する。

第二章：競争- 走ること

ペーチャはボリースと分かれてから、グレープ Ил . И . という詩人と知り合って、つきあいだす。一年ほどの散発的な情事のあと、彼らはある共和国（グルジア）へ旅行に出かける。そこでは独立運動が盛んで、グレープ Ил . И . は独立の象徴として担ぎ出される。またスヴェルチョコクという詩人が出現し、グレープ . . . と親交を暖める（スヴェルチョコク、すなわちこおるぎとはプーシキンのあだ名）。失敗に終わった政治集会のあと、二人は夜会に招待される（主催者はニコライ 1 世）。ところが、ニコライはペーチャと踊ってばかりいるため、グレープ . . . は嫉妬をし、権力を乱用してペーチャにニコライと踊ることを禁じ、さらに彼女を隔離して独占する。さらにスヴェルチョコクが決闘で殺される。手を下したのは^{ダンテス}歯医者（プーシキンを実際に殺したのはダンテス）だが、裏で糸を引いていたのはニコライであり、というよりむしろニコライが体現する専制政治である。

共和国が併合されると、グレープ Ил . И . は失脚し、同じ部屋に住めるように居住登録するのに苦労する。その後彼らはルジェドミトリー（偽ドミトリー）とその妻タチャ・

ニヴァンナ（オネーギンのタチャーナ）と同居する。今度はルジェドミトリーが僭称者として権力を握るが、かなりの浮気者で、ペーチャにも好意をもつ。そして二人はニコライ・スチェパノヴィッチ（グミリョーフ）が収監されている監獄に忍び込んで逢引するが、その死の銃声を聞いて帰ってくる。結局ペーチャはルジェドミトリーに愛情を抱いていないことを悟り、グレーブ Ил . И . とともにモスクワに帰る。

第三章：大公国…

ペーチャは偶然ボリースと再会する。その頃にはボリースはエズダンドゥクタと離婚していた。恋人たちは再び結ばれる。二人は郊外（外国ともとれる）の一軒家にやってくる。そこには主人の「私の愛しい人 МИЛЫЙ МОЙ」と Н.З.（ザボロツキー）が住んでいるが、さらにエズダンドゥクタ、グレーブ . . . 、ルジェドミトリーとその妻もやってきて、一種の芸術サークルのような形でいっしょに暮らしはじめる。彼らはゴルバチョフに祖国の状態を憂える手紙を送るが、返事はこない。ペーチャは男性たちのマドンナ的存在になる。この家の主人である私の愛しい人は、オランダ大使の養子で、非常に魅力的な人物だった（ダンテス）。しかし女性のハートをつかむ名人であるはずの彼は、ペーチャを誘惑しようとして失敗する。彼は逆恨みをして、ボリースを中傷する匿名の手紙を送りつける。ボリースは決闘を申し込もうとするが、「私の愛しい人」はエズダンドゥクタと婚約することで危機を回避する。しかし結婚式のパーティでペーチャに厚かましく接近する「私の愛しい人」に、ボリースはもう我慢することができなかった。結局、決闘が行われる。このときも、アンドリューシャが登場し、「私の愛しい人」に有利になるような試合運びをし、ボリースは銃弾に倒れ、数日後亡くなる。

3) プロットとパロディ

この三部作に限っていえば、プロットとしての明確さが見えるのは、家庭的な姉と情熱的な妹、そして彫刻家の三角関係が主筋に据えられている、第一章の『オコロ・エコロ…』のみである。

『競争—走ること』は大きく前半と後半に分かれる。前半部分ではペーチャの新しい恋人グレーブ . . . は、ボリースの兄弟分として連想される（聖兄弟ボリースとグレーブ）。またグレーブ . . . はプーシキンとも重ねあわされることで、詩人と国家権力の関係が風刺される。後半、失脚したボリースに変わって登場したルジェドミトリーは、プーシキンの戯曲『ボリス・ゴドゥノフ』を容易に連想させる。オネーギン風の伊達男を気取っているこの僭称者の妻は、言ってみれば、オネーギンと結婚してしまったタチャーナである。

『大公国…』は、『競争—走ること』のプーシキンをめぐるエピソードを練り直し、より充実させたもののように思われる。物語の展開はプーシキンとその妻、妻の恋人ダンテスをめぐる一連のスキャンダルをそのまま引き写している。とはいえ、プーシキンの妻を悪女とするような単純な従来型の見解はとらず、ナイーブな女心を心憎く描写している。

特に後者二つの作品において、文学的なパロディが多用されるが、その上にプーシキンやグミリョーフ、ザボロツキーなど実在の人物の苦い運命がからめられることで、ロシア文学と国家権力との戦いの歴史が強調される。

4) エロティシズムについて

そもそもナールビコワの作品は初の女性による官能小説だという触れ込みで出版された。「ポルノグラフィ」であるとか「スカートをはいたマルキ・ド・サド」などといった噂が流れた。ナールビコワはソビエト時代には検閲を通らなかったような言葉を使っているし、性的な描写も多いかもしれない。しかしそれが当時のロシアでは非常に新鮮に受け取られ、ナールビコワが一瞬にせよ時代の先駆けとなったのかもしれない。しかし性的に過激であるとはまでは言えないだろう。では、いったい何がナールビコワをエロティックにさせるだろう。それには次の三点が答えとしてあげられるだろう。

第一、文体。これについては作家アンドレイ・ビートフはナールビコワのデビュー作に寄せた序文で「彼女の文体は、息遣いのように彼女固有のものである」と賞賛している。また沼野恭子はビートフのこの言葉を受けて「この呼吸のような文体の運動こそが、まさしく彼女のテキストのエロティシズムを成り立たせている秘密にほかならない」と述べている。性的なニュアンスがあるなしに関わらず、非常に独特な文体を展開するが、簡単にまとめると、ナールビコワの文体では、言葉の意味の輪郭がぼやけてしまったり、ロジックが解体されてしまう。しかしその一方で意味を剥ぎ取られた言葉は、まるで音楽のように響きあう。実のところ、ナールビコワのテキストは読むための言葉というより、口にされ、耳にされることで快感を得られるものではないか、つまりこうした身体的・感覚的な刺激がエロティックと呼ばれるものなのだと考えられる。

第二、物語構造。つまりプロットであるが、ナールビコワはどの小説においてもいわゆる三角関係を基調にして物語を展開する。物語といっても、そんなに複雑なものではなくて、中にはあらすじを述べるといわれてもあらすじにならないような小説もある。『競争—走ること』は、パロディが豊富で連想ゲーム的な言語遊戯が盛んであるが、プロットといえるものはほとんどない。他方、『オコロ・エコロ…』の第一章は、パロディ的な要素は少ないものの、プロット面では充実している。恋人が姉と親しくなり、婚約結婚することで、非常に心理的な緊張が高まり、人間関係そのものが欲望を高揚させるような配置をとっている。

第三、身体描写。身体描写は文体の問題とも重なるだろうが、ここでは文体の言葉そのものがエロティックに響きあう効果に対して、身体描写については別個に考える。ナールビコワが身体を表現する基本的な方針としているのは、客観的に観察するというより、主体的な感覚が描くことだといえよう。つまり身体を観察し描写する対象のではなく、身体感覚そのものを描写している。こうした感覚は我々が実際に五感で感じ、そして考える状態に近いきわめて身体的な視点である。

ナールビコワは伝統的なロシア文学、特にソビエト文学が避けてきた性的な側面に手をつけたといわれているが、性的な刺激を掻き立てるには、ナールビコワの身体描写は、あいまいで多義的で、知的なゲームに走りすぎている。ヴァチェスラフ・クーリツィンによれば「エロスを言葉に昇華し、言葉自体がエロティックになり … 文体そのものが性交の似姿に変わるようにする」ことがナールビコワの目指す課題であるという。しかしここでは直接例を見たほうが分かりやすいだろう。

как только она ему открыла, и только успела закрыть дверь, и как только они обнялись, они уже не прекращали обниматься, они только то и делали, что жутко обнимались и целовались прямо в дверях у вешалки, где висели пальто: <сними ты свое пальто>, — <а ты свое>. Борис оставался в пальто, а на Пете была ночная рубашка, в которой было жарко, как в пальто, и сзади у нее на <пальто> была здоровая дырка, и когда она уткнулась лицом в пальто, которое висело, Борис расстегнул свое пальто, а Петя так и оставалась в своем дырявом <пальто>, и тогда он через дырку в ее рубашке, совершенно явную дыру в плоскости, попал в объем, через пустоту он попал в глубину. (12 - 13)

そして彼女が扉を開けた瞬間、そしてようやく扉を閉めた瞬間、そして彼らが抱き合った瞬間、彼らはもう抱き合うのをやめなかった。戸口のすぐのところ、コートの掛かっているコート掛けのところ、ただひたすらかたく抱き合ってくちづけするのだった。「コートを脱いでちょうだい」——「君も」。ポリースはコートのままで、ペーチャは寝間着のままだった。それはコートを着ているみたいに暑くて、そして彼女の「コート」の後ろには立派な穴があいていて、そして彼女が掛かっているコートに顔を埋めたとき、ポリースは自分のコートのボタンを外し、ペーチャは穴のあいた「コート」のままで、彼は彼女の寝間着の穴、全く明らかに平面上の穴を通して、容積に入り込み、空虚を通して、深みにはまった。

一言でいうと、このシーンは待ちに待った恋人とやっと会えた瞬間である。前段階として、姉が外出の準備に手間取ってなかなか出かけてくれずに、ペーチャはなかなか恋人を迎えられずにいるのですが、渴望していた出会いの瞬間が訪れたとき、その瞬間は非常に引き伸ばされて描写される。「そして彼女が扉を開けた瞬間、そしてようやく扉を閉めた瞬間、そして彼らが抱き合った瞬間、彼らはもう抱き合うのをやめなかった」という部分がこの場面でもっとも緊張している、まさに出会いの瞬間である。長いこと別れていて、さらにじりじりと待たされた後では、欲望がもっとも高揚した状態にもっていかれている。そのため時間が引き伸ばされて「瞬間」に閉じ込められている。あるいは「瞬間」が拡大されていると取ることもできるだろう。

そして「待機」によって引き伸ばされた欲望の後に、非常にセクシャルなほのめかしがつづくが、あいまいで抽象的な、まるでダダイズムの芸術作品のように描写される。穴であるとか、容積、深み、空虚というのは、きわめて抽象的な語で、具体性はまったく欠いているが、しかしエロティックなコードとして機能している。言い直すと、状況がエロティックな核心にせまればせまるほど、描写の核心ははぐらかされるようになっていく。つまりナルビコワにおけるエロティシズムとは想像力を刺激する知的なゲームととらえるべきである。

参考文献

- Битов А.С первыми опытами... // Юность.1988.№.8.С.15.
- Курицын В. Жизнь с кокаином // знамя. 1992. №1.С.214.
- Линецкий В.Парадокс Нарбиковой //Даугава.1993.ноя-дек.С.142
- Нарбикова В. Около эколо... М., 1992.
- Larissa Rudova “A Mindset of Present Russia : Valeriya Narbikova’s Fiction.” *Russian Literature*. 39(1996):79-94.
- Marina Ledkovsky, Charlotte Rosenthal and Mary Zirin, eds., *Dictionary of Russian Women’s Writers* (Westport: Greenwood Press, 1994)
- Nadya L. Peterson, ‘Games Woman Play’, in Helena Goscilo ed., *Fruits of Her Plume* (Armonk : M. E. Sharpe, 1993), 165-183.
- Ritta Pittman, “Valeriya Narbikova’s Iconoclastic Prose.” , *Forum for Modern Language Studies*.28-4(1992):376-389.
- Vitaly Chernetsky, ”ΕΠΙΓΟΝΟΙ, or Transformations of Writing in the Texts of Valerija Narbikova and Nina Iskrenko”, *Slavic and East European Journal*.38-4(1994):655-676.
- 沼野恭子「セックスの擬態、リアリズムの復権——現代ロシアの文芸誌と女性作家——」
『ユーラシア研究』17号、1997、18頁
- 沼野恭子「ロシア文学とフェミニズムの微妙な関係について」『現代思想』25 - 4、青土社、1997。
- 前田しほ「ナールビコワ『一人目のプランと二人目のプラン』について——文体的特徴を中心に」、『スラヴ学論叢』第5号(2)、2001、146-160.
- 前田しほ「ナールビコワのエロティシズムとその構造」『ロシア語ロシア文学研究』34、2002、75 - 81 .